NEWS

JAAF
HIROSHIMA
陸協ひろしまニュース
一般財団法人 広島陸上競技協会
第83号
H29.3.10発行

Maki Ueda

上田万葵

「広島の上田」を全国へ
15才の可能性

陸上人　　# FILE0021

人一倍の負けん気と勝利への執着心

上田　万葵

800m　大野東中学校　*Maki Ueda*

プロフィール　上田万葵（うえだ・まき）160cm／45kg／2002年（平成14年）1月9日生まれ
大野東中学校入学後に陸上を始める。1年生時は短距離。100mで通信2位。県選4位。1年生の冬から駅伝を通じて距離を延ばす力を蓄えて、2年生の4月終わりから全中出場を目標に800mに挑戦。北海道全中への出場を果たす。（予選落ち）翌年、長野全中での優勝を目標に本格的に取り組む。春先に膝の故障。通信は回避して県選にかけ、全中突破ラスト1本の決勝で標準記録を突破。その後は膝の調子もよく、岩手国体でも優勝。高校へ進学後も400m、800mを中心にインターハイや国体などの全国レベルでの勝負を目標としている。

自己ベスト

800m	2分10秒56
200m	25秒79
100m	12秒89

主な成績

長野全中	800m優勝	2分10秒56
岩手国体	少年B800m優勝	2分10秒73
第24回全国中学校駅伝	3区　1位	6分39秒

2016年、広島陸上界の「新星」が光り輝いた。廿日市市大野東中3年の上田万葵だ。女子800mで全国中学校体育大会と国体少年Bの2冠を制し、年末の全国中学校駅伝でも区間賞を獲得。「広島の上田」の名を全国にとどろかせた。

8月の全国中学校体育大会は、まれにみる圧勝劇を繰り広げた。号砲と同時に先頭に躍り出ると、力強い腕の振りとストライドで独走。残り300mからは一段とスピードを上げ、2位に2秒以上の大差を付けてゴールした。

「言葉にできないぐらいうれしかった」と初々しく振り返った優勝は、広島陸上界の歴史に刻まれる快走でもあった。タイムは2分10秒56。1988年8月に橋元千佳代（仁方中）がマークした広島県中学校記録（2分11秒83）を実に28年ぶりに更新した。女子800mでの広島県勢の優勝も、2000年の浦田佳小里（誠之中）以来16年ぶりの快挙となった。

勢いは続く。10月の岩手国体少年女子Bの決勝は、高校1年生6人を含む8人で雨中での対決となった。得意の先行策を狙ったが、**「思うように走らせてもらえなかった」**と高田真菜（東京・早実高）に続く2番手で追走。残り200mでスパートを掛けたものの、逆に引き離され、3番手まで順位を落とす。

並の中学生なら、健闘もここまでだろう。だが、上田は残り50mから歯を食いしばって再加速。持ち前のスプリント力を発揮し、ゴール直前で、前を行く2人を抜き去った。**「絶対に勝つつもりだった。中学生であることを、負けた言い訳にしたくなかったので」**。自己ベストに届かなかった2分10秒86を「悔しい」と振り返ったことと併せ、人一倍の負けん気と勝利への執着心で「2冠」をつかみ取った。

決して高校1年生がふがいなかったわけではない。2位の広中璃梨佳（長崎・長崎商高）は翌1月の全国都道府県対抗女子駅伝4区で11人を抜き、実業団選手らを抑えて区間賞を獲得。「スーパー高校生」と呼ばれる逸材を、中学生が800mで上回った事実は特筆されるべきだろう。

大野東中の主将として臨んだ12月の全国中学校駅伝の3区（2km）でも、圧巻の走りを見せた。1区で33位と大きく出遅れたチームを、2区鍋島萌花と2人で計28人抜きの5位に引き上げる力走を披露。3位入賞の原動力となった。

鍋島からたすきを受けた時点では20位。「一つでも順位を上げる」と猛然と前を追い、滋賀県野洲市のクロカンコースを疾走した。一人、また一人と抜き去り、最後のトラックではさらにスパート。15人抜きの5位でたすきをつないだ。記録は6分39秒で区間賞。この大会で2km区間を走った全144選手のうちで最速タイムを刻み、ここでも全国ナンバーワンのスピードを実証した。

廿日市市出身で、本格的に陸上を始めたのは大野東中入学後から。当初は短距離に取り組み、磨いたスプリント力が成長を下支えしている。3年春の織田記念陸上では100m、秋のジュニアオリンピックでは200mに出場するなど、距離の適正も幅広い。ちなみに2年時の800mの自己ベストは2分16秒台。3年春に左膝を痛め、2カ月も練習できなかった日々も飛躍の糧となった。急成長の要因について本人は**「監督の指導のおかげ」**と謙遜するが、大野東中の竹田純子監督は**「負けん気の強さが特長。3年生になって、それがいい方向に出てきた」**とみる。

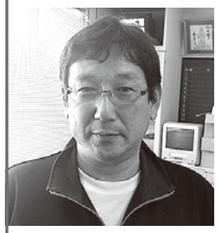
ストイックに練習に打ち込む姿勢は、周囲にも好影響を与えた。特に全国中学校体育大会で優勝して以降は、**「日本一の選手が身近にいる。私たちもできるはずと、全国のトップを狙う意識が高まった」**と竹田監督。広島県勢では10年ぶりとなる全国中学校駅伝トップ3入りも、頼れる主将抜きでは語れない。

今春からは県内の高校へ進学する予定。目標とする選手に池崎愛里（舟入高）を挙げ、**「高校でも800mや400mで勝負する。インターハイだけでなく、国際大会にも出場してみたい」**と夢を描く。広島のホープから、日本のホープへ―。15歳の眼前には、無限の可能性が開けている。

text by K

天皇盃 第22回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会を終えて　26位

2017年1月22日［広島］



広島県男子チーム　監督
岩本　真弥

吉田が1区でいい流れを作ったので、うまく流れるかと思ったが、2区植野は経験不足だった。3区圓井に浮上を期待していたが、体が動いていなかった。やはり3区で若いスピードランナーを起用する必要を感じた。

4区5区は全くの力不足。最初突っ込んで後半失速するという悪循環に陥ってしまった。ここに1年生を使わざるを得ないことが、育成がうまくいっていない現れである。

6区細迫はよく走ったと思う。7区鎧坂は、体調が十分ではない中、広島の絶対エースとして起用したが、モチベーションが上がらず、不本意な結果となってしまった。全国男子駅伝の難しさを感じた大会だった。

これから、強化のあり方について、真剣に議論していかなくてはならないと思っている。

吉田圭太選手のコメント

1区:4km／区間6位:20’20”

自分の役割として、先頭に近い位置でたすきを渡すことを目標にしていたので、それは達成することができ、合格点をつけられると思います。でも、区間賞が取れなかったので、その点では自分の力不足を感じました。大学に進学して、さらに力をつけて、また広島県代表としてチームに帰ってきて、優勝に貢献したいと思います。

総合成績／26位（2°23’02”）

1区	6位	20’20”	吉田　圭太（世羅高）
2区	36位	9’05”	植野　泰生（熊野東中）
3区	19位	24’52”	圓井　彰彦（マツダ）
4区	29位	15’00”	前垣内皓大（世羅高）
5区	41位	26’07”	梶山林太郎（世羅高）
6区	10位	8’50”	細迫　海気（坂中）
7区	22位	38’48”	鎧坂　哲哉（旭化成）

皇后盃 第35回全国都道府県対抗女子駅伝競走大会を終えて　34位

2017年1月15日［京都］

昨年度、15位という結果に終わり、今年度こそは14年ぶりの入賞へ!と、春より強化合宿を行ってきた。夏には昭和北中学校の樫原沙紀選手、大野東中学校の上田万葵選手が全国中学校陸上優勝、冬の全国高校女子駅伝では世羅高校が8位と2年連続の入賞。本大会に向けて弾みがつく結果となった。昨年度、課題であった一般選手の参加には今年度も苦戦を強いられた。所属チームが在籍する県からの出場、または出身県からの出場を希望するなど、広島県から出場できる選手を多く集めることができなかった。これは昨年度の反省を活かしきれなった結果だと痛感している。

年が明けた1月4日より女子駅伝チームは調整合宿を始動した。調整練習が進むにつれ、故障からチームを離れる選手が出てきた。広島県チームとして重要区間を予定していた選手離脱のダメージは大きく、本戦では高校1年生に負担をかけてしまう区間配置となった。大会前日から雪で、当日には10センチ以上の積雪。大会が無事に行われるよう京都陸協をはじめ、大会関係者は除雪に追われ、また広島県スタッフも各区間で選手がウォーミングアップを行えるようショベルを購入してコース作りをして頂いた。予定通り12:30スタート。1区小吉川は年末体調を崩し不安を抱えてのレースとなった。走り始めから本来の走りができず46位発進となり、2区以降の選手は悪い流れの中のタスキ繋ぎとなってしまったと感じる。昨年度の課題としても挙げていたが、上位チームの高校生出場人数は平均3名。広島県は2年連続5名出場している。一般選手の活躍をこれからも大きな課題として取り組む必要がある。

本大会に向け、年間を通じて尽力していただいた指導者の皆様に対して感謝の気持ちと同時に、このような結果となり本当に申し訳ない気持ちである。今後の大幅な飛躍を目指し対策を練りたい。

広島県女子チーム　監督　山田　貴子

総合成績／36位（2°25’11”）

1区	46位	21’29”	小吉川志乃舞	（ユニバーサルAC）
2区	41位	13’36”	平村　古都（世羅高）	
3区	14位	9’46”	樫原　沙紀（昭和中）	
4区	36位	14’05”	神笠　貴子（世羅高）	
5区	30位	14’17”	平岡　美帆（舟入高）	
6区	26位	13’43”	森長　彩理（世羅高）	
7区	35位	13’42”	藤倉　美和（世羅高）	
8区	41位	11’05”	下高　美聡（坂中）	
9区	19位	33’28”	田村　紀薫（ユニクロ）	

田村紀薫選手のコメント

9区:10km／区間19位:33’28”

初めて都道府県駅伝に出場した時から憧れていた9区だったので、不安も大きくありましたが、走れる嬉しさや有り難みを感じながら走りました。あまり順位を上げることは出来ませんでしたが、また9区を任せて頂ける機会があれば、この経験を踏まえ今回以上の走りで広島チームに貢献できればと思っています。

↑山田貴子監督（左）と田村紀薫選手（右）

平成28年度 全国高等学校駅伝競走大会を終えて

2016年12月25日［京都］

男子

世羅高校
7位（2°05’49”）

男子については吉田に尽きる。調整も練習も順調に進んでいたが、全く想定外の走りとなってしまった。1年間吉田がすべてを背負い、負担をかけてしまったのではないだろうか。開会式での選手宣誓や親子2世代での1区区間賞への期待など、数々の重圧がかかってしまったように思う。1区でレースの流れに乗ることができなかったので、あとの区間は最低限の走りに終始してしまった。結局は力不足だった。男子も女子も、史上初の男女同時連覇への期待を背負って、生徒も苦しかったのではないか。私自身も苦しい1年だった。

これからは、力相応の期待を受けることで自分の力を発揮できるように練習を積んでいきたい。

世羅高校　監督　岩本　真弥

長嶺龍之介選手のコメント

2区：3.0km ／区間8位：8’20”

自分としたら、2区区間8位で納得のいく走りはできませんでしたが、チームとしては入賞できたので良かったです。来年以降、後輩たちの力で再び優勝し、2連覇・3連覇を目指してほしいと思います。大学に進学したら、1年生からレギュラーに入り、主力として走ることができるように、さらに努力して力をつけたいと思います。

女子

世羅高校
8位（1°09’21”）

向井の調子が上がらない中、向井の起用と留学生ナオミの起用を最後まで迷った。当初は2区平村3区向井4区森長を予定していた。しかし、思いの外ナオミの調子が上がり、使える目途が立ったので2区に向井、3区ナオミを起用したが、うまく機能せず、経験不足で失速してしまった。しかし、後半の4区平村・5区神笠がいい走りをしたので、8位入賞という最低限の目標は達成することができた。

今年を振り返ると、エースの調子が上がらず、もどかしい1年だった。幸い大西もよく走り、他の1年生もいい走りをし、良い経験となった。来年に向けて良い材料もあり、もう一度仕切り直しをしたい。やはり大西が中心になるが、神笠と平村の3本柱でチーム全体の底上げをして再び頂点に立てるよう努力したい。

世羅高校　監督　岩本　真弥

昨年末に京都で行われた全国高校駅伝大会では、たくさんのあたたかいご声援ありがとうございました。私たちの目標としていた優勝には届きませんでしたが、入賞という結果を残すことができたことはたくさんの方々のおかげだと思っています。

私は全国の舞台に憧れ、駅伝の強豪校である世羅高校陸上競技部に入部しましたが、3年間、全国の舞台に立つことができませんでした。私の心の弱さから、思うような結果が出せず、何度も腐りそうになりました。3年生時には、キャプテンを務めさせてもらいましたが、責任の重さや、プレッシャーから、何度も投げ出し、逃げ出したくなる時もありました。辛いことや苦しいことが多かった3年間でしたが、自分のやってきたことに後悔はしていません。世羅高校陸上競技部で良かったと思います。今も陸上競技を嫌いになれず、大学でもう一度挑戦したいと思える自分があるのは、私は「人」に恵まれてきたからだと思っています。

私には、陸上競技を通して、すばらしい指導者に出会い、励まし合いながら一緒にがんばれる仲間がいました。いつも見守ってくれている家族、いつも応援してくれた世羅町や故郷の地域の方々、先生、辛いことを忘れさせてくれた楽しい学校の友達がいたからここまでくることができました。支えてくださった全ての「人」に感謝しております。そして私は、大学で活躍した姿を見せることで支えてくださった方々、後輩に恩返しをしたいです。これからも、私と世羅高校陸上競技部員は、たくさんの「人」の支えがあることに感謝し、それを自信に走り続けていきたいです。

世羅高校陸上競技部　主将　見田　杏花

大西響選手のコメント

1区：6.0km ／区間2位：19’19”

自分が目標にしていた区間賞には届かなかったけど、今まで練習を積んできた力は発揮できました。チームとして目指していた優勝には届かなかったので悔しかったけど、みんなの力で勝ち取った入賞なのでよかったです。来年は優勝できるようにがんばりたいと思います。

第61回
全日本実業団対抗駅伝大会

ニューイヤー駅伝 2017

1月1日（日・祝）、群馬県庁(群馬県前橋市)を発着点とする「第61回 全日本実業団対抗駅伝競走大会（通称：ニューイヤー駅伝）」が開催され、中国実業団連盟から中国電力、中電工、マツダ、JFEスチールの4チームが出場した。

優勝候補は3連覇を狙うトヨタ自動車、2位以降は混戦という展望。レース序盤は混戦を極め、目まぐるしく順位が入れ替わった。優勝は4区以降3連続で区間賞を獲得し、5区で先頭に立った旭化成が18年ぶり22回目の優勝。2位にトヨタ自動車、3位にトヨタ自動車九州と続いた。

中国実業団連盟からの参加チームは、序盤マツダが8位入賞争いをする走りを見せたが、中盤から徐々に順位を上げてきた中国電力に5区の途中で追いつかれた。その後は中国電力が8位入賞争いを演じたが、7区のアンカー勝負で力負けしてしまい9位に。続いて15位にマツダ、前半から流れに乗れなかったJFEスチールと中電工がそれぞれ32位、37位となった。

前回大会に続き8位入賞をすることができず、地区として非常に厳しい結果となった。関東地区に有力チームが集中している現在。ひとつでも上の順位を残し、広島県から全国で活躍するチームとして存在感を示していきたい。

広島県実業団連盟　本多　浩隆

マツダ4区　山本憲二選手→
中国電力4区　米澤　類選手↓

総合成績

1位	旭化成	4：49：55
2位	トヨタ自動車	4：51：02
3位	トヨタ自動車九州	4：52：18
9位	**中国電力**	**4：53：57**
15位	**マツダ**	**4：55：37**
32位	**JFEスチール**	**5：02：26**
37位	**中電工**	**5：06：15**

年代別レポート

小体連

8月の暑い中、東広島TFCの選手たちは第19回全国小学生クロスカントリーリレー研修大会広島県予選を勝ち抜き、12月10・11日大阪万博公園で行われる本大会へのキップを手にした。昨年からの目標を達成した喜びと安堵感が広がった。

12月の大会までは、県民大会・県小学生総合体育大会（陸上競技の部）、廿日市市小学生駅伝、三原駅伝など多くの大会に参加して健脚と心を磨いた。

大会当日。東広島からチームメイト・保護者が多数応援に行き、選手たちを盛り上げた。まず初めの友好レースでは男子の宮田孝輝が9位。女子の小畠芽が29位と快走。チームに勢いをつけた。クロカンリレーの部では1区女子キャプテンの石原優衣子が15位とまずまずのスタート。2区の中田透羽が区間5位の快走で一気に5位まで押し上げる。3区の河野さやな・4区の樋熊海斗・5区の藤田実優で少し順位を落とすも、6区の男子キャプテンの和田虎星が区間4位の追い上げ、13位でゴール。入賞まであと20秒差だった。しかし目標としていた県ナンバー「34」よりもいい順位だったので選手たち・コーチ・保護者も大満足だった。

最後に大会会場で東川副会長・浜﨑常務理事には選手たちに暖かいお声掛けを頂きましてありがとうございました。そして広島の小学生を支えてくださる関係者皆様に感謝を申し上げます。

東広島TFC　コーチ　矢野　晃

中体連

中学生の駅伝シーズンを振り返る。11月、各地区を勝ち上がった男子56チーム、女子55チームが賀茂台地を舞台に行われた中国中学校駅伝（県駅伝）に出場した。女子は昨年の覇者、大野東が2区でトップに立つとそのまま逃げ切り2連覇を達成。男子は、1区からトップを守り続けた昨年度優勝校、坂を最終区で高屋が逆転。3年ぶり3度目の優勝を飾った。両校は、広島県代表として滋賀県希望が丘文化公園に会場を移した全国大会に出場した。全国大会では、大野東が広島県女子としては、第15回大会（2007年に福山市立一ツ橋中学校が第6位）以来の入賞となる3位に入った。レースはショート区間（2.0㎞）で2区鍋島萌花（3年：区間2位）、3区上田万葵（3年：区間賞）、4区永野友菜（2年：区間3位）としっかり流れをつくり一時は2位に浮上するなどトップ争いを展開した。男子は、1区櫛田亘平（3年：区間11位）で好スタートを切ったが後続が本来の力を発揮することができず広島県勢として2年連続入賞を逃した。

1月に行われた都道府県女子駅伝には中学生代表として樫原沙紀（昭和3年）、鍋島萌花（大野東）、下高美聡（坂2年）の3名が選ばれ大会へと挑んだ。当日は、3区樫原、8区は下高が力走した。下高はまだ2年生であり今回の経験を来年に生かしてほしい。1月24日には地元広島で開催された都道府県男子駅伝に中学生代表として細迫海気（坂3年）、増木祐斗（坂3年）、植野泰生（熊野東3年）の3名が選ばれ大会に向け準備した。当日は、2区植野、6区細迫が出場し細迫の区間10位が光った。改めてメンバーの体調を合わせること、駅伝には流れが大事であることを痛感させられる都道府県駅伝であった。長距離全体のレベルアップ、都道府県代表の選考を目的に強化合宿を毎月行っている。地域の競技力向上を目指し合同練習や練習のさじ加減、生徒の意欲を高める指導を先輩指導者から学ぶ機会も増えている。

駅伝シーズンに突入すると各地でロードレース大会が行われ、存分に走る楽しさを味わう子どもたちがいる。また、小学生や中学生、一般が陸上競技を楽しむ陸上教室を実施している地域も増えている。このようにして、陸上の競技人口を増やし、将来、生徒たちが、陸上競技をこよなく愛し、高校へ進学しても陸上競技を続けてくれることを願い、子供たちの夢に少しでも携わることができる喜びを感じながら私たち指導者も成長し続けたいと思う。

最後に、毎日の部活動指導に加え、合同練習や練習会を支えてくださっている指導者の方々に感謝したい。

東広島市立西条中学校　鈴木　晶雄

高体連

2016年度高校生の活躍

駅伝の季節となった。本年度は広島県代表として男女とも世羅高が全国高校総体へと出場した。

世羅高は男女とも8位以内に入賞した。1・2年生の勢いを感じる大会となり、来年度も上位入賞を目指してほしい。出場メンバーは次のとおり。

●全国高校駅伝

◎男子　7位　世羅高　2時間05分49秒
1区　3年　吉田圭太
2区　3年　長嶺龍之介
3区　2年　デービッド・グレ
4区　1年　梶山林太郎
5区　2年　愼颯斗
6区　2年　幟立晃汰
7区　1年　前垣内皓大

◎女子　8位　世羅高　1時間09分21秒
1区　2年　大西響
2区　3年　向井優香
3区　1年　ナオミ・ムッソーニ
4区　1年　平村古都
5区　1年　神笠貴子

また来シーズンへ向けてのチェックポイントとしての日本ジュニア室内大阪大会ではB決勝を含めると7名が8位以内の結果を残してくれた。

●女子ジュニア60mH
7位　池田和香那（宮島工業高）8秒82

●男子ジュニア三段跳
4位　岡本健　（三原東高）　14m87

●女子ジュニア1500m
2位　池崎愛里　（舟入高）　4分28秒99

●男子ジュニア60m
5位　松尾隆雅　（神辺旭高）　6秒89

●男子ジュニア60mHB決勝
8位　小林亮太　（神辺旭高）　8秒41

●男子ジュニア棒高跳
7位　岡本江琉　（神辺旭高）　4m80
　　菅颯一郎　（神辺旭高）

広島県高体連陸上競技部競技力向上委員長
広島皆実高校
樋口　裕志

学生連盟

2017年1月24日に天皇杯全国都道府県男子駅伝が広島県で行われた。私たち広島県学連は審判員や補助員として駅伝運営に参加した。天候は時より雪が舞い、寒さに耐える仕事となった。審判は走路監察員の仕事をさせてもらった。選手が安全かつ正しい道を走ってもらうために誘導する仕事である。

1月3日の箱根駅伝では神奈川大学の選手があわや自動車と衝突する事態があったので責任を持ってやらせてもらった。仕事をしている時は選手が間近を走り抜けて行くのでとても迫力があった。また補助員は小学生が作成した各都道府県の応援旗をスタートゴール地点で持つという仕事をした。また駅伝が終わった後は、走った選手から小学生にお礼のメッセージを書いてもらった。男子駅伝の審判補助員には毎年参加させてもらい貴重な経験をさせてもらっている。来年もまた責任を持ち仕事をしていきたい。

話は変わるが今年7月には西日本インカレが広島県で行われるため、学連は忙しくなる。しかし、これもなかなかない経験である。都道府県駅伝同様に選手ファーストで運営ができるように中四国学連としっかり連携をとっていきたい。

中国四国学生陸上競技連盟広島支部
広島修道大学　山本　雄大

実業団連盟

≪2017年度に向けて≫

新年度が近づき、新しいシーズンの幕開けに期待を寄せる今日。次のシーズンはどのような選手が活躍をするのだろうか。選手にとってこの冬期練習が次のシーズンを占う重要な時であることは間違いない。

さて新年度を迎える前に、2016年度を振り返ってみると、実業団連盟所属選手では木村文子選手（エディオン女子陸上競技部）が第100回日本陸上競技選手権大会の女子100mハードルで優勝する活躍をみせた。惜しくもオリンピック出場とはならなかったが、必ず優勝するという気迫溢れる走りは見ているものを熱くするものだった。

そして、そのオリンピックでは、東京を拠点に活動する、ここ広島県出身の山縣亮太選手が4×100mリレーの1走を任され、見事日本男子トラック史上初 の銀メダルを獲得する快挙を成し遂げた。それは寒気が走るほどの感動であった。

このふたつの感動から感じたことは、「地元選手の活躍」が、他にないより一層の感動を広島に与えたということだ。地元選手の活躍は何よりの誇りと喜びを感じるものであった。

そして新年度迎えるにあたり、あらためて感じたことは、実業団連盟の使命は広島を引っ張っていく存在でなくてはならない。そのためには、強く、輝く選手がいなくてはならないということである。そのことが、陸上競技の普及に繋がり、これからの広島県陸上競技界の発展に少なからず寄与するものであると感じている。これから新たに強く、輝く選手が広島から生まれることを期待している。

広島県実業団陸上競技連盟　事務局
中国電力　本多　浩隆

マスターズ連盟

新年度 スタート

2月の総会を経て2017年度活動計画がスタートしました。昨年度広島マスターズ陸上は過去最高の340名の会員数となり、「明るく、楽しく、マナー良く」のキャッチフレーズの下、生涯陸上競技現役を目指す会員の輪がどんどん広がっている。

2017年度は6月11日に第35回記念広島マスターズ選手権大会（びんご）、7月29～30日に中国マスターズ選手権大会（鳥取・布施）、10月15日に県マスターズ記録会（庄原）、10月27～29日に全日本マスターズ選手権大会（和歌山・紀三井寺）、11月3日に中国マスターズ駅伝（庄原・国営備北丘陵公園）等が開催される。小学生から始まる広島県陸上競技団体のバトンを繋ぐ、集大成がマスターズ陸上だ。

生涯スポーツで健康と生きがいつくりへ皆さんの参加をお待ちしている。練習会も広島市、呉市、東広島市、三原市で月1回開催して技術の向上と会員の交流の集いを行っている。

●詳細は広島マスターズ陸上HPをご参照下さい。
ホームページアドレス
http://sports.geocities.jp/mastershiroshima/

広島マスターズ陸上　広報　前田　征四郎

第24回 全国中学校駅伝大会を終えて

男子の部 22位

「全国への切符を必ず掴もう。」部員全員の真摯で前向きな気持ちと、多くの方々のご支援をもって、中学生の長距離選手にとっては夢の舞台である全国中学校駅伝に出場させていただくことができた。広島県大会後の約1ヶ月間、大会8位以内入賞を目指して、校内での練習以外にも駅伝大会への参加、記録会への参加、滋賀県の会場での試走等に取り組んだ。生徒はどの活動にも意欲的に参加してくれ、充実した1ヶ月を過ごすことができた。また、万全の状態で大会に臨めるよう選手の体調管理をしていただいた保護者の方々の細やかな心配り、「全国大会に行かれるそうですね。頑張ってください。」と幾度となくいただいた地域の方々の温かい励ましにより、生徒は全国大会に全力で挑むことができた。滋賀県に移動後、一部選手の体調不良もあり、満足な状況でのレースができず目標は達成できなかったが、櫛田主将はレース後の挨拶の中で、「保護者の皆さんのおかげでこの大会に参加することができました。私達が果たせなかった目標を、来年は1、2年生が果たしてくれると思います。」と、保護者の方々への感謝の気持ちとともに後輩に願いを託した。選手の思いを受け、今大会での経験から学んだことや選手の願いを、後輩達にしっかりと伝え、再び「夢・目標に向かって挑戦」させたいと思う。最後に、保護者、地域の方々、現地でコーチをしてくださった馬屋原先生、物心両面で支えていただいた東広島市教育委員会の方々、東広島市の陸上部の先生方、高屋中学校の先生方にも感謝し、来年度の健闘への決意表明としたいと思います。ありがとうございました。

東広島市立高屋中学校　監督　大瀬戸　積

私は、1年生の時から全国中学校駅伝に憧れていて、いつか出たいという気持ちで毎日練習していましたが、中国中学校駅伝で1年生の時は7位、2年の時は3位と全国大会へは行けませんでした。しかし、3年生となった今年、中国中学校駅伝で優勝することができ、全国大会に出場することができました。全国大会出場が決まり、滋賀の会場に試走に行きました。全員が初めてのスパイクを履いてのレースということで不安もありましたが、メンバーの調子は上向いており、入賞できるのではないかと思いました。そして迎えた当日、憧れ続けたその場に立った私は胸がいっぱいになりました。前日の調子から区間8位以内はいけると思っていました。レース前から描いていたイメージの通り、積極的に入ることができましたが、8位以内という目標には届くことができませんでした。全国大会という高いレベルのレースは甘くはありませんでした。「来年も走りたい。」できないことだとわかっていてもそう思ってしまいました。この悔しさは後輩たちに託そう思います。全国大会という大きな舞台に立つことができたのも、ここまで支えていただいた先生方、保護者、チームメイト、地域の方のおかげです。支えてもらうことが当たり前ではなく、感謝の気持ちを持つことが大切だということがわかった中学校でのクラブ活動でした。

東広島市立高屋中学校　主将　櫛田　亘平

女子の部 3位

2度目の全中駅伝は、昨年度と違う会場での挑戦となった。「今年は勝負する!」と優勝を視野に入れ、9月に現地の下見を行ったが、広い芝生が広がるばかりで、手探り状態で試走だった。結局、正式なコースは本番直前まで確認できず、予想以上に手強いなと感じた。平日の練習も、下校時刻との戦い、重なる学校行事など、慌ただしい毎日の中で必死に練習時間を確保して取り組んだ。ただ、そんな毎日はとても楽しく、全中駅伝当日がやってくることが楽しみでもあり、終わってしまうことが淋しくもあった。現地入りした日から気温が下がり、慌ててお手製保温グッズを現地で調達したりして備えました。当日は、陽射しもあり12月にしては暑い中でのレースとなった(笑)大野東が勝負できるとしたら「スピードしかない!」と、全中出場経験のある3名の選手を前半区間に起用しました。全中800mを制した上田をなるべく後に残して追い上げる作戦。レース展開はほぼ予定通りで、最後はアンカーが意地で3位を守ってゴールしてくれた。レース後の選手は、悔し涙もあったが、何とも清々しく輝かしい姿だった。頑張る生徒達に出会い、保護者、学校関係者、地域の方々の惜しみないご協力と応援をいただき、精一杯挑戦することができたこと、心から感謝している。本当に貴重な経験の中で多くの事を学ばせていただき、ありがとうございました。来年度は県予選突破がかなり厳しい状況になることが予想されますが、出場を目標に頑張っていきたい。引き続き応援よろしくお願いいたします。

廿日市市立大野東中学校　監督　竹田　純子

私たち大野東中学校陸上競技部女子は、昨年に続き2回目となる第24回全国中学校駅伝大会に出場しました。昨年度、「全中駅伝」という大舞台を初めて経験し、全国トップレベルの選手と一緒に走り、強さを痛感しました。今年度は、「全国優勝」を目標に掲げ、日々の練習でチームメイトと競い合い、個々の走力を上げることと共に、チーム力を高めました。予選会である中国中学校駅伝大会では、昨年とは違うプレッシャーの中で、連覇を果たすことができました。嬉しさと同時に、その日から全中駅伝までの1カ月は、それまでよりもさらに緊張感を持ち、目標に向けて高い意識で練習に取り組みました。大会当日は、「挑戦者」という立場で思い切り走り切ることができました。チーム順位は、3位と目標には届かなかったものの、みんなで全力を出し切り、勝ち取った3位に悔いは残っていません。私は夏の大会では思うように走れず苦しい時もありましたが、この全中駅伝という最後の大舞台までにみんなで毎日練習に取り組めたことと、貴重な経験ができ、3年間陸上を続けて良かったと心から思っています。この全中駅伝でも、先生、家族、地域の皆さまと多くの方々にお世話になり、応援していただきました。これからも、感謝の気持ちを忘れず強い選手になるために走り続け、恩返しをしたいと思います。新チームは、さらなる好記録を目指し、私たち3年生は高校に進学し、それぞれの目標達成に向け、頑張っていきます。これからも大野東中学校陸上競技部の応援をよろしくお願いします。

廿日市市立大野東中学校　主将　鍋島　萌花

2017中国女子世羅駅伝

2月12日午前6時。世羅町は−5℃、一面の銀世界。この日、県北庄原市高野町では2月としては観測史上最も多い146㎝の積雪で大雪警報も出ていた。誰もが駅伝の開催を危ぶむ朝だった。しかし、競技役員や選手が中継所に到着する午前10時過ぎには路面は雪もなく乾き、何の支障もない状態になっていた。まるで、何ヶ月も前から準備して来られた世羅町の人々の熱い思いが雪を溶かしたかのようだった。スタートの12時には時折雪は舞うものの、日差しもあり、良いコンディションの中、選手の力走が続いた。前回2位の広島市陸協Aが1区から一度も先頭を譲らずフィニッシュ。昨年の雪辱を果たした。1区から2位に16秒差を付けて好スタート。さらに4区では中学生に贈られるドリーム賞を受賞した谷本七星選手(国泰寺中)が軽快な走りで差を1分に拡大。昨年5区で逆転を許したアンカーの中畑友花選手(玉川大)が廿日市市陸協A、地元世羅陸協Aの猛追をしのいで逃げ切り雪辱を果たした。選手も指導者も一丸となり、堅い結束のもとの“全員駅伝”。心の襷を繋いで大きな勝利を呼び込んだ。なお、最優秀選手賞は3区区間賞で広島市陸協Aとの差を19秒にまで縮める力走を見せた廿日市市陸協Aの岩崎愛未選手(玉川大)が受賞した。この駅伝は地域の方々の協力なしには成り立たない。走路ボランティアとして沿道に立ってくださる多くの住民の方々、中継所にと自宅の庭先を快く提供してくださる方、寒風吹き荒ぶ中温かな声援を送ってくださる住民の方々、枚挙にいとまがないほどだ。地域の方々のご尽力あっての成功と深く感謝しております。また共催してくださった世羅町・世羅町教育委員会、御協賛いただいたJAグループ広島、御協力いただいた世羅警察署他関係者の皆様にも心よりお礼申し上げます。

中国女子世羅駅伝競走大会　第1中継所主任　清水　祥子

優勝監督

選手たちが期待に応えてくれて優勝を奪還することができた。1区の平岡が順調に滑り出し、2区3区がうまくつなぎ、4区谷本がさらに差を広げて、そのままアンカーが1位でフィニッシュテープを切ることができた。先行逃げ切りというプラン通りのレースを想定していたが、その通りの走りをしてくれた結果である。来年度も勝ち続けていけるよう、控えの選手も含めて強化を進めていきたい。

広島市陸協Aチーム　監督　大前　隆之

最優秀選手賞

高校生・一般区間では一番短い区間を走らせてもらって、チームに感謝しています。追い上げて順位を上げるという役割は果たせたと思います。これまで故障で十分に走ることができていないので、この大会で刺激を受けて、大学生活最後の一年で活躍していきたいです。

玉川大　岩崎　愛未

ドリーム賞

トップでタスキを受けることができてすごくうれしかったです。チームが優勝したうえに、ドリーム賞を受賞できてとても光栄です。来年度は、全国大会で1500mで4分30秒を目標にして、決勝に残ることができるよう、練習を積んでいきたいと思います。

広島市立国泰寺中学校　谷本　七星

青少年の夢を応援します!

青少年健全育成協力企業

- ●株式会社サタケ
- ●広島駅弁当株式会社
- ●株式会社広島銀行
- ●広島ガス株式会社
- ●広島電鉄株式会社
- ●学校法人石田学園
- ●株式会社中電工
- ●株式会社もみじ銀行
- ●広島綜合警備保障株式会社
- ●有限会社ニシヒロ
- ●アシックスジャパン株式会社
- ●有限会社道後山高原サービス
- ●有限会社BTM
- ●株式会社体育社
- ●中国電力株式会社
- ●大塚製薬株式会社
- ●株式会社ツルハグループドラッグ&ファーマシー西日本

(順不同)

平成29年3月10日　〒730-0011 広島市中区基町4番1号 (公財)広島県体育協会内　Tel.082-223-3256 Fax.082-222-6991　E-mail:haaa@eos.ocn.ne.jp　URL http://hiroshimatf.org/
編集委員　藤原　文代・渡辺　勇一・為末　大・金尾　誠可・河田　慎司・政　泰治・本多　浩孝・松谷　清志・井上　恭治・鈴木　晶雄・以南　めぐみ・山本　雄大